

## 違和感を覚える大阪朝日「維新特集」

写真は朝日新聞 4 月 19 日「大阪維新の会をめぐる 10 年間とこれから」。5 面の紙面全体を使った特集であり、維新 10 年「俺たちこそ自民」、政権との太いつながり アピールなど、大きな見出しが並ぶ。

リードから一地域政党「大阪維新の会」は 19 日、設立 10 年の節目を迎える。自民党から分裂して生まれ、大阪政界を席卷。新しい世代の議員も加わり、地域に根ざした政党として定着しつつある。一方、2025 年の実現をめざす大阪都構想以降のビジョンは不透明で、地域政党を母体とする国政政党「日本維新の会」は広がりを見せている。



大阪維新の会 10 年に「エール」を送るような記事に違和感を覚えた。大阪で、なぜ維新が強いのか、政権との太いパイプ、選挙「上手」など、これまでも指摘されてきたことが紹介されている。記事を読んで、2019 年 11 月に出版された朝日新聞大阪社会部『ポスト橋下時代 大阪維新はなぜ強いのか』を思い出した。大阪政治の舞台裏を描いたノンフィクションであり、参考にはなったが、維新に対する一面的な見方など疑問に感じることも多かった。

特集の中で示唆に富んだのが、内田樹さんのコメントである。「このパンデミックで世界的な経済の停滞が予測される時期に、万博や IR のような『祝祭的イベント』で経済浮揚効果を狙うのはまったく不適切です。お祭り騒ぎの余力があるなら、コロナ禍で痛めつけられた住民のための医療、福祉、教育など公共的なセクターに優先的に予算を配分すべきだと思います。方向を百八十度転換しなければならない。頭の中身を入れ替えることができるかどうか。僕は難しいだろうと思います。」

内田さんの上記コメントに同感する。大阪にお祭り騒ぎの余力など残っているだろうか。大阪朝日として長年の「付き合い」から、大阪維新の会 10 年を特集するのも分らないでもない。維新に寄り添ってきた記者たちにとって、維新 10 年を振り返ることは、それなりに意義深いことだろう。でも、コロナショックで時代は大きな変化を遂げつつある。「大阪一強」と呼ばれる維新の強さの舞台裏を暴くだけでなく、維新政治 10 年で大阪がどう変わったかを、事実にもとづいて検証・評価するのが、権力を監視するはずのメディアの責務ではないだろうか。

維新特集を組むなら、コロナ禍についても言及すべし。コロナ禍で大阪の医療・保健体制の脆弱さが露わになっているが、「二重行政」解消を掲げてきた維新政治 10 年の「影」の側面もきちんと取り上げるべきであろう。

(2020 年 4 月 21 日)